





瀬戸内晴美作品集〇〇八〇
いずより

筑摩書房

瀬戸内晴美作品集 第八卷

昭和四十七年三月十五日 第一刷発行

定価 八八〇円

著 者 瀬 戸 内 晴 美

発行者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話

東京(元)七六五一(代表)

振替 東京 四一 二二三

郵便番号 一〇一一九一

印刷明和印刷・製本 矢嶋製本

(分類) 1393 (製品) 72608 (出版社) 4604

目次

いづこより

解説

川村二郎

三三

三

い
ず
し
よ
り

第一章

いつの頃から、その二本の線路が私の記憶の底に棲みはじめたのであろうか。

月も星もないのに、夜の闇に仄かな明るさが滲んでいる。その底に、鉛色のなめらかな鋼鉄の肌を、それ自体から燐光を発しているようなほの白さで冷え冷えと光らせ、線路は闇を縫い裂き、どこまでも走っていた。草も、樹も、家も、その背景にはなく、ただ闇だけが、遠くへいくにつれ濃く艶めきながら拡がっていた。

私たちは、その線路の上を歩いていたのである。それとも、その横に添った路をたどっていたのか。私を背負っている母の足もとは、時々乱れ、時にはつまずき、その度私は、母の背中、頬を母の肩にうちあてて。母があやうくつんのめる時は、軽い私の軀は、母の背で他愛なく弾み、母の首筋を超え、髪のアたりまで顔がうちあげられる。母の背はあたかく、柔かく、弾力があつた。それに母の冷たい髪にふれる時のこそばゆい快さ……それらの記憶は、あの二本の線路と同時に生まれたものなのか。

もうひとつの、母に背負われている時の記憶は、人気の

ない淋しい道をたどっていた。片側に、赤土色の土塀がどこまでもつづいている。その時の母も、時々足もとを乱し、私はその背でふいの衝撃をうけては小さな軀を弾ませ、ふり落されまいとあわてて母の背にしがみつくのだった。

母は時々、重い溜息をもらした。ほうっと小さな声になつて唇を破るほど、母の溜息は大きかった。うなだれて、足もとをみつめながら歩いている母は、もしかしたら泣いてでもいたのだろうか。

いつからともなく、時々思いがけない時に、思いがけない場所で、ふいに臉の裏をかすめるその闇の中の線路の幻影は、必ずしも失意の時や、悲哀に沈んでいる時にあらわれるとはかぎっていなかった。華やかな場所へゆくため、盛装し、車にゆられている時とか、賑やかに友人にとり囲まれ、陽気な笑い声の中で愉しい団欒をしている最中など、ふいに、目の中が翳り、闇の線路がしらじらとつづくのが見えてくる。

そんな時、誰に気づかれるひまもなく、一瞬の後には、目の裏に浮んだ幻影をす速くかき消してしまっている。もちろん、硝子の壁の中になげこまれたような、何の手がかりも足がかりもない虚しい淋しさにつつまれている時にも、一歩も足をふみだす気力も萎えしぼんだような心身の疲労の極にも、その幻影は無遠慮にあらわれてくる。気まぐれ

に、全く一方的に訪れるその幻のもつ意味を、私はまだかつて、一度も真剣に見つめ考えてみようとしたことはない。

幼時に無意識のうちに心の襞の中に奥深くたたみこまれてしまっている無数の記憶の中から、なぜか、その情景だけが執拗に浮び出してくる。母の背の感触や、母の溜息の伝わってくる感覚は、もっと後になって記憶され、それが線路の記憶にどこかでふっと結びつけられたのかもしれない。

人生というものが、決して華やかな陽の照る大道を歩くことではなく、闇に近い暗さの中を、うなだれて、とぼとぼとたどっていく果しない道のりだということを、母はその生涯の経験の中から、子供に肌で教えこんでいったのかもしれない。

後になって、あの道の母の背で凍りつくような淋しさと怖ろしさが忘れられないと母に話した時、母は、はっと顎を引き、あの時は辛いことがあって、死のうかと思いつめ、夢中で私を背にくくりつけて家をぬけだし、歩いていたのだという。私の記憶の中の暗い道は、そこを抜けてしまうと、もう引きかえす気力がなくなりそうで、何度も行きつ戻りつしていたところであったという。

「あの頃、あなたはことばの遅い子供で、まだ片ことともに喋れなかったのが、あの道で、突然、おれろれろれろ

と、節をつけて歌うようにいいだしてねえ、言いだすとやめなくて、まるで子守歌のように背中でいつづける。私もつい、つりこまれて、その口調にあわせて、おれろれろれろとあやしているうちに、気持が静まってきて、家に帰る気になってね」

母は唇をまるく突きだすようにして、おれろれろれろといってみせた。

その時から二十余年が過ぎていた。幻の記憶の線路に重なって、もうひとつの線路のある風景が新しく私の記憶に重なっている。大人になっている私は、自分の脚で土を蹴るようにして歩いていた。私は母のようにうなだれてはいなかった。むしろ、昂然と首をあげ、薄い肩をそびやかすようにして大股に歩をはこぶ。同じなのは、行手にどこまでも灰色の二本の線路がのびているということだった。私は背に、見られている意識を凝らせていて、歩みを止めることも、歩調を乱すことも出来なかった。

厳冬の東京の空は鉛色に低くたれこめていて、太陽も病んだように生色がない。線路ののびている背景の町は、暗く、間口もせまく屋根も押しつぶれたように低い家々がつぶいていた。

東京の場末の尾久という町。二月の初めの風は冷く、頬も首も寒さに鳥肌だってくる。そのくせ胸は灼けるように

熱く、耳も頬も燃えている。ふりかえることは出来ない。ふりかえった瞬間、前に進んでいる脚が、一気に後へかけもどるのはわかりきっている。

夫に抱かれて、娘が無心な目をあげ手を振って、私を送ってくれている。

「ママ、いつてらっちゃい」

ようやくまわりはじめた舌でいいながら、小さな手を振りつつける。娘は夫に私が病院へいくのだといきかされたのだ。私の右の目は白い眼帯で掩われていた。夫が力まかせに固めたこぶしでこの目を突くほど、夫を激昂させたのは二日前のことだ。いさかいの直接の原因はとるにたぬほどささいなことだった。

その前日、故郷の姉から、父のインバネスを直して送り、送ってくれたオーバーの型を、みっともないと夫がけなし、それに私がさからった。普通の夫婦の間でなら、何でもなく笑い話で交わされる会話が、すでに半年以上も心の歯車をくいちがわせている夫婦の仲では、すべて深刻な意味を帯びてくる。私は夫の言外に、実家や肉親への軽蔑を読みとったと思い、夫は私の横柄な口答えに、押えつつけ、がまんしつつづけている不貞な妻への、日頃の正当な怒りの堪忍袋の緒を切ってしまう。

夫の軀と夫の拳がいきなり飛びかかってきた時、私はと

つさに事態がのみこめず、ぼんやり無防備に夫をみつめていた。そのみひらいたままの右の目から、火花がちり、軀は仰のけに突きとばされていて、頭をしたたかに壁に打ちつけた。気を失わなかったのは、打ちつけた後頭部の痛さのためであり、同時に目から流れだした血のぬらついた感触の不気味さと、思わず押えた掌にべっとりといてきた血の色のあまりの鮮烈な赤さのためだった。私も夫もその瞬間まで、その場に小さな娘がいたことを全く忘れていた。

「パパ……ばか、ばか」

娘の瘡高い叫び声が、ほとんど自失していた私たちの意識を同時に呼び覚ました。娘は小さな軀を毬のように弾ませ、夫の脚に打ちかかっていた。夫は座敷の真中に突ったって、部屋の隅まではね飛ばされ、ぼろ屑のようにうずくまり、血にまみれている私を呆氣にとられたように見下していたが、自分の脚にしがみついて、小さな拳でうちかかってくる娘を見ると、いきなり、その軀を抱きあげて激しく抱きしめた。そうされたまま娘はまだ夫の頬を打ちつつづけた。

つい二日前のそんな激しい経験も、まだ三歳の娘には一晩も記憶には止まっていないううだった。父と母が、傍にいてというだけで、娘はすぐ安心しきった表情になり、夫がいつものように勤めに出かけた後では、片ことの歌を歌

いながら、隣りへ遊びに出かけていったものだった。その日から眼帯をかけた私の顔にも見馴れ、娘は、自分も「白いめがね」をかけたがったりした。

娘が、私に手をふって行かせてくれた病院とは、娘の小さな頭の中では、その前々日、私が「かさね」のように腫れ上った目を濡れタオルで押えながら、娘をつれて訪れた近所のわびしい眼科医院だったのだろう。その医院は、私の今歩いていく線路ぞいの道を反対にとり、夫と娘の立っている地点よりまだ数百米後方に位していた。三歳の娘に方角の観念はまだ生まれていず、私の歩いていく線路の涯に、私と共に行ったあの暗い医院が映っているのだろうか。

私は進駐軍から流れたうす緑のブランケットを染め直して仕立てたコーヒー色のズボンをはき、その上に、同じ材質でつくった薄紅色のジャケットを着ていた。さっきまではその上に例の黒い不吉なオーバーを着ていたのだったけれど、どうしても別れさせてくれという私の声をだまって聞いた後で、夫はいった。

「オーバーをぬいで行け」

愕いて夫の顔をみつめ直した私に夫の声がかぶさった。

「そこまで決心したなら、着のみのままで行け」

私はうなずいてその不恰好なオーバーをその場でぬぎ、疊んで道の傍の石の上に置いた。

「マフラーもとりなさい」

夫の声にうながされ、それをオーバーの上に重ねた。その手でポケットから財布をとりだして重石のように上に置いた。文字通り着のみのままになって、夫と娘の立っている傍から歩きだした。

道は線路に添ってどこまでも続いている。右側には、住宅がつづき、左側には工場がまばらに建っていた。晴れた日でも、その辺一帯は、どこか薄曇ったような暗い感じのする土地柄だった。湿気た沼地の上に建っているようなみすばらしい都営住宅の家並が、押しつぶされたような惨めさで並び、一ひねりでつぶれてしまいそうな安っぽいその建物の一つの、更にその一室に、私たち親子は、もう二か月近く身を寄せあっていた。

すでに一年あまりも、私たちは自分たちの巢を真剣に探すことを怠っていた。先ず、巢づくりから始めるべき家庭というものが、夫と私の間では根底からゆらいでおり、本気で家探しをする前に、家庭を支える柱をうちたてる地盤の地固めから、やり直さなければならぬ状態だったのだ。

娘は北京で生れて以来、一処に落着く閑もなく転々と居を移したので言葉を覚え難かった。北京語であやしくれた阿媽のことが耳にしみこんだ頃、引揚げて四国の田舎町へ移り、その土地のなまりの強い古風なことは、よう

やく耳馴れた頃、また東京へ移っている。娘は、聞きわけ
ることは聡くなつても、自分でことばを選ぶときは、通つ
てきた町々の、それぞれにちがうことばに混乱させられる
らしく、何かいいかけては、小さな唇をまるく突きだすだ
けで、ことばは出さず、やがて口をしつかりとへの字に結
んでしまうのだった。その上、私という母親は、娘がこと
ばを覚えようとする頃から、夫でない男と恋におち、じぶ
んひとりの物想いに捕われてしまい、世間の母のように、
やさしく、添寝の時に子守唄を歌つてやつたり、おとぎば
なしを聞かせてやつたりするということはなくなつていた。
私は娘とふたりきりでいる時、啞になつたようにひっそり
と口をつぐみ、自分の心の奥ばかりを執拗にのぞきみつめ
ていた。心の奥は泡立ちあふれ、いつでも激情がしぶきを
あげて渦まいているような激しさだったので、いつそ私の
表情や動作は無感動をよそおい、面のように表情を硬ば
らせ、動作は深海の底を歩く人間のように、緩慢で物静か
になつていた。

心が凝りすぎるせいか、指の先まで神経はゆきわたらな
くなり、手にしたものをぼろぼろ落してしまい、指からす
べり落ちた物が、激しい音をたててくだける時、はじめて
はっと目覚めた表情にかえつたりするのだった。

娘はそういう私のそばで、ひっそりと、ひとり遊びをす

る癖をいつのまにか覚えこみ、全く世話のやけない子供に
育つていたが、まるで鏡のように私の神経の動きを敏感に
映しとり、私の秘めた喜憂の影をはっきりとそのつづらな
瞳に反映させるのだった。

そんな頃、おとなしく世話のかからない娘が、ふいに魔
にみいられたように夜泣きの癖をつけてしまった。私の胸
の中で乳房をしつかりと握りしめながら、一度は必ず、眠
りにおちていくのに、二時間もすると、針でつつかれてい
るように鋭い声をあげて泣きむせぶ。そうなれば、どんな
にあやしても娘は泣きやまず、昼間のあの聞きわけのいい
おとなしさはどこかへ消え去り、か細い背骨を折れそうな
ほど撓め、顔を真赤に力ませて、握りしめた自分の爪で掌
を破りそうに軀じゅうで苛だつ。深夜の道に、私は泣き叫
ぶ娘を背負い、そつとぬけだしてゆく。月のある夜も、星
座の光る夜も、私にはそれらの夜々がいつでも闇に近く感
じられた。冷たい外氣にふれると、娘は泣き声を次第に柔
げ、やがて笛のように咽喉を鳴らしはじめ、ひくっひくっ
と、すすり泣きの声をとぎれがちにもらしながら、一つの
まにか泣きやむ。そのくせ、歩みをとめると、また、針に
さされたような鋭い泣き声呼びもどす。泣き声が消え、
泣きじやくくりがすっかり弱まり、やがて、おだやかで愛
らしい寢息が、私の背を暖かくくすぐるまで、一時間でも

二時間でも深夜の道を歩きつづけなければならぬ。月も星も仰ぐ姿勢は忘れ、終始私は首うなだれ、白いアスファルトの道や、露地の石畳や、夜露にしめつた柔かい土の道をあてもなく歩きつづけた。

遠い昔、母の背にゆられながら、母の心の嘆きを肌で吸いとったことがあったように、娘も、もしかしたら、愚かな母の嘆きを無心の瞳に映しとり、柔かな肌から吸いおとしてしまったのかもしれない。私がうなだれて歩く母の姿を、心の記憶に焼きつけているように、娘も、深夜の道の私のうなだれた背を、心の襷に縫いこめていのではないだろうか。

数多くの引越や、長い集結生活や、引揚船の不如意な何日かの中から、娘は疲れて眠くなると、くるつと、どこにでも身を丸め、まるで小犬や小猫が眠るように、頭も手足も自分の胴の中に抱きこんで、風呂場の簀の子の上でも、台所の床の間でも、廊下の片隅でも、寝ころがってしまうわびしい癖をつけていた。そんな娘も、やはり私の背の上での眠りには、いっとう安らぎを覚えるらしい。

魚の背のように光る二本の線路の幻影は、こうして二重写しになって瞼の裏で重複し、過去のすべてを、その二筋の、尽きる果もない線路にのせ、どこまでも遡らせ、あらゆる過去の時間と、場所と、事件と、心情の綾や翳りま

で、なまなましくよみがえらせてくる。それは一卷のフィルムを映写機で映し、物語の筋を追うようなよみがえり方ではなく、暗黒に閉ざされた舞台の一部に、いきなりどこからともなくまるい照明があてられ、そこにある瞬間の静物や、人物の表情や姿勢などがくつきりと写しだされるという現われ方だった。照明の光の輪は舞台の闇を螢火のようにふわふわと飛びかい、その度、その光の輪の中には、過去のある瞬間の情景や心理がくつきりとあらわれる。ひとつひとつの光の中の事件や人物は、時間と場所の関連が全くとぎれているように見える。そのくせ、記憶の中では、その途方もなく離れ離れで、ちぐはぐな情景が、ほぐしようにもないほどに入り乱れて、混乱して、もつれてみえる記憶の網目の中では、互いに引きあい、しっかりと糸と糸の端がつなぎあっているのだ。

一九四四年の夏、娘を産んだ時、私は二十二歳だった。

多くの娘たちがそうであるように、何の理由もない他愛ない憧れから、三十代で死にたいと、娘時代には切望していた。十九や二十の娘にとって、三十代は女の盛りに見え、秋薔薇のたわわなまめきとはかなさと、何よりも夕映のような華麗で淋しい輝きがあった。それにくらべて、四十代の女の佛というものは、ひたすら現実的な台所臭い匂いや、生活の垢やしみに汚されているようで、憧れを誘われ

なかった。十九や二十の娘にとっては、女の四十歳も五十歳も同じで、六十歳や七十歳はもう人間ではないような老醜しか想像されなかった。

今、私はいつのまにか娘の二倍をすぎる人生を生きのびているというのに、自分の年齢が信じられないし、一向に自分の人生の重みがその生きてきた歳月にふさわしいという実感がわかない。娘を産んだ二十二歳の私と、その二倍を生きた今の私にどれほどの差があるというのだろう。肉体は、正確に律儀に、歳月の足あとを刻みつけている。かつては、か細い薄い胸にせめぎあうように重々しく豊かにみのり、両の掌に支えきれずあふれていた乳房は、今は片掌にひっそりとおさまってしまう。熟した桃のような手応えのある瑞々しさと固さを指に伝えてきた乳房は、今はマシマロのような手ざわりの柔かさしかとどめていない。何の味わいもなく鉛筆を立てたようにすぼっと伸びていた娘時代の軀は、腰が張りだし、肉がつき、紡錘型の魚のような型に変わってしまった。いくら眠っていても眠りたりたということのなかった眠りが、その半分の睡眠時間でも何とか保つようになっている。手入れをしないままにのび放題にのびて、いつのまにかほどくと腰を掩うまになつた髪は、まだうるさいほど密生している。けれども、ある朝、ふと鏡の中に映った一房の白髪のきらめきは、ぞっと

するような鮮かさで、私を狼狽させてしまった。頭の中心部に近く、内側にかくされていたのでつい見落していたらしいその一房の白髪は、抜くと、たいした抵抗もなく手に残った。しなやかで細い黒髪とは別人のもののように硬く、びんと筋ばった白髪は、根本から先端まで一点の濁りもない見事な銀色に輝いていた。私はその銀髪をくるくる指にまきつけてみた。私のしらないまにひそかに私を裏切っていたその白髪は、それ自体としてはあまりの美しさに輝いていて、見つめる感情は混乱してしまう。一瞬、全髪銀色になった自分を鏡の中に空想してみる。その時には、首筋でふつりと切り揃えるか、もっとさっぱりシングルカットに刈りあげて、額の片ほうの一房を華やかな紫色に染めあげてみよう。そして、明るい蔷薇色の服を着よう。そんな空想が脳裡をかすめるのもつかの間で、私はやはりこの銀髪に裏切られているような納得し難い不満がこみあげてくるのである。視力はもっとひどかった。それだけは誇りにしていた視る力が、友人の誰よりも早く老眼の徴しをみせはじめ、それは年と共にひどくなる一方で、今では、新聞の字が眼鏡なしでは淡墨を流したようにしか見えない。

三十すぎの頃から十年近く愛しあったことのある男は、私より一廻り以上も年上だった。男はある日、唇もとに曖昧な微笑を浮かべ、

「本当をいってやろうか。新聞の字が、この距離じゃ、淡墨を流したようなんだよ」

そういつて、膝の新聞を両腕をかるく曲げて顔の前にひらげてみせた。男の年齢に甘やかされ、男の年齢にいたわられつけていた私は、男が告白する男の老いさえなつかしく、いそいそと声を弾ませて誘った。

「どうしてかくしてるの、さ、すぐ眼鏡買いにゆきましようよ。あたしとちがつてそんなに鼻が高いんだもの、おっこちることはないでしょ」

いった後ですぐ、もっと同情すべきだったのかとあわて、声をひくめ、

「実はね、あたしも時々、物がぼんやりみえるし、目が始終しばしばするのよ。もう老眼なんじゃないかしら」

共犯者めいた薄笑いで男に媚びるように囁いた。もちろん男は私の老眼説など一笑に付してしまった。

男はじめて眼鏡をかけて、妻の許から訪れた時、私はちょうど下宿の部屋の前の庭に佇っていた。五月の晴れた日で、そこには下宿の大家の老婦人が丹誠した白牡丹がたわなにひらききったところだった。眼鏡の奥から男は笑いかけながら、牡丹をはさんでわたしの前に立った。「ほら」男は自分の眼鏡をかけた表情を私に馴染ませるように鼻をつきだすようにする。

「似合ってる」

「これかけるとね、世の中が急にきらきら輝いてくるんだよ。ものの型がかつきりして、急にわっとこっちへ押しよせてくるようだ……」

「あたしの顔は」

「いつもよりもっと小っちゃくなってしまった。線がしまるからかな」

男は眼鏡を外して、見馴れた眉間の皺をつくると、顎をひくようにして牡丹を眺めた。細い長い指先で、私の腕の内側を撫でるような手つきで牡丹の花弁を撫でると、片手で眼鏡を鼻にのせ、花の中へ顔をうずめるように近づけた。「すごいね、この芯」

金色の花芯は、炎をふきあげているような猛々しい感じで、花粉をべつとりとまつわらせ、花の中心にひしめきあっていた。私はおどけて男の眼鏡を借り、かけてみた。まわりが急にぼやけ、ボナールの絵のように色彩が滲み、混沌としてきた。ふいに厚い霧にまきこまれたような不安定な感じがして、その場にしゃがみこんだ。

あの五月の午後からも、十年あまりの歳月が流れている。そして私の傍にその男はすでにいない、私が黒いふちの眼鏡を重そうに低い鼻にずらせて、これを書きすすめている。

三つの年、捨て去ったまま、もう二十年近くも逢うこと

もなくすぎた娘の父親は、近眼で、眼鏡の似合う中高の顔を持っていた。切れ長の目は大きく深く彫ったようにかつきりと刻まれていて、眼鏡をとつても眼姿は変らなかつた。娘は生れた時から、私の手許にいるまでは、容貌は父親似で軀つきは私に似ていた。

私が夫と娘の許を出て、半年ばかりたった頃、夫が娘の写真をくれた。わずか半年の間に娘はみちがえるように肥り、しっかりと顔つきになっていた。何よりも愕かされたのは、一目みて、私の子供時代の写真かと思うほど、私そっくりに変わっていたことだった。まんまるくコンパスで描いたような丸顔に濃い眉がせまり、左右びっこの目がしっかりと見ひらかれている。

「よく似てきただろう」

愕いて声も出ないでいる私の様子をみつめていた夫がいった。私の幼時を知らない夫の目には、その写真が現在の私に似ていると見えるだろうか。

「きみがいなくなつて、だんだん、気味が悪いくらい似てきたんだよ」

似てきた娘の写真をみせれば、自分の軽挙を悔い改め、夫と娘の許にかえる気がおこるのではないかと、夫は考えているようであつた。私はその一葉の写真をとりかえされまいと、あわてて自分のハンドバッグにしまいこんだだけ

ど、その時も娘の許に帰つていこうとはしなかつた。

もう二枚、娘の写真が手許にある。娘の二十歳の写真である。一枚は、自宅の縁側の椅子に白っぽいワンピースを着ているもので、もう一枚は、羽田空港の国際線の改札口で、まさに改札口へ入ろうとするところのスナップだった。その二葉の写真の娘は、もつと私に似ていた。

「まあ、きれいな娘になりましたね。お父さん似だから、私よりずっと美人ですわね」

私は写真をくれた人の前で、わざとらしい声をはりあげていた。たしかに写真の娘は、その年頃の私よりは、はるかに整った顔つきをしているし、よく見れば、目も鼻も私より娘の父親に似ている。それなのにぱっと一瞬に受ける感じが、父親より私の方に似ていた。ちょうど私が娘の父親にめぐりあつた年齢に当る娘は、その頃私のしていたように、前髪を眉までおろし、後は首筋をおおい肩までのばした髪型にしているのだ、いつそう私の娘時代にまぎらわしい。そんな髪型を娘は自然に自分が選んだのだろうか。それとも娘の父がそれとなく似合う髪として教えたのだろうか。半袖のワンピースから出ている格別細い腕の、いかにも頼りなげな感じや、花茎のようにすつとのびただけで、豊かな胸以外にはどこにもふくらみのない細い見るからにしなやかな軀つきとか、足首の細さがそのまま膝までのび

たような脚の線とか——どれもみな、かつての私の若い日の特徴でないものはなかった。私に似ていて、私よりも上品でしとやかに見える娘の写真に、不思議な親愛感と気恥しさを覚えていた。と同時に、まじまじと目を離さず、見つめつづける視線の中には、逢うことを二十年もせかれていた母がわが子の成長した写真をみるという、迫った激しい感激は一向に湧いていないのに気づくのがあった。

私の目は、まるで、知人の娘の写真をみるような冷静さでそれを見つめていたし、その写真から、娘の属する生活のすべてを空想しようと、心をさわがせていた。娘の知性娘の性格、娘の趣味、そして今、娘の心を占めている人生への願望、あるいは人しれず心にたたみこんでいる娘の恋の秘密、そうしたすべてを写真の背後から一瞬につかみとろうとするように、視線は次第にけわしくなっていく。それは子を捨てた母親が、こういう場合におかれた時の、動物的な肉親感情とか、母性愛というものにはおよそ縁遠いものであった。どう眺めても、その美しく成人した写真の娘が、心の底に二十年秘められてきた娘の幼い佛と重ならない。今、胸の中に棲わせている娘は、夫にもらった写真のあの私に似たまるい佛でもなかった。それは、あの果しない線路を、灰色の尾久の空の下にたどっていった朝、私の背後で、夫の腕の中から無心に手をふり、無邪気な別れの声を

あげて、見送ってくれたあの娘の顔なのであり、あの頃の夜泣きする娘の顔なのであった。私の胸の中では、娘は歳月とともに成長せず、死児のように別れた時のままで年齢も成長を停止している。そして今、娘の写真をみる私の目は、母親の目でも血縁者の目でもなく、一人の小説家としての、好奇心にみちた冷たい食欲な目つきなのであった。

アメリカへ留学する旅の首途に写された娘の表情は、幾分堅く、冷く、どこか暗い表情をたたえている。わたしの二十歳には、その暗さと陰影は無縁だった。わたしは指で自分よりも、心もち大きくしっかりと結ばれた娘の唇を、なぞる。そうすれば写真の娘が声を聞かせるかのように。その時切実に、娘の声を聞きたいと思った。あやうく忘れかけていた娘の幼い声は、ことばに自信のないせいか、どこか弱々しく、ひくく、ささやくような声だった。今、成長したこの娘はどんな声で自分の心を人に伝えるのだろうか。

眉山という優しい名前前の山は、文字通り、女の眉のような、なだらかな弧を描く稜線を持っていた。四国山脈の東の端にあたり、その山の麓をめぐって、帯のような細長い町が紀淡海峡に面していた。傾城阿波鳴門のお弓とお鶴の物語や阿波踊りで知られている徳島の町だった。町の真中

を青い帯締のように一筋の川が飾っていた。吉野川の支流の新町川と呼ばれ、川岸には白い藍倉の壁が立ち並び、昔、蜂須賀公の城下町として栄えた時代、全国的な藍の産地だった全盛の名残りとどめていた。兩岸の藍倉の白壁が川面に映り、その川の中の白壁の上に夕映えがさし添うのは美しい眺めだった。川にはのどかに砂利舟や、運送船が往来していた。

河口は紀淡海峡にそそいでいたが、その河口が小さな港になっていて、大阪通いの連絡船が朝晩二往復している。連絡船の汽笛の音は、ぼうぼうと物悲しい響きの余韻をふるわせ、船の出入りを告げ、河口の港から小さな町のすみずみまで走りこむ。

港から五百米と離れていない私の家の私の枕元にも、その音は伝わってきた。未明に入港する船が沖合で告げる汽笛の音は、たいていぐっすり眠っている私は聞きもらすのだったが、まれには夢の中までその声はなだれこみ、私の眠りを呼びさますこともあった。私は汽笛の声を怖いもののように、しっかりとふとんの衾かけのビロードを小さな手でつかみながら、ふとんの奥へ奥へともぐりこんでいく。そのくせ、全身は耳になって、ぼうっ、ぼうっ、先の音を追いかけるようにあとからあとから生れてくる汽笛の声を捕えていた。その音は、何かをゆすりあげるような力強

さにはじまり、声の終りは何かから追われていくような頼りなさを持って弱っていく。汽笛の声に馴れきっている家族たちは、誰も目を覚ましていないことを私は知っていた。部屋の中の灯は消され、ふとんの外にも、ふとんの中よりもっと濃密な闇がたちこめていることも知っていた。私はふとんの中の生あたたかい闇の中に目をみひらき、汽笛の音につきあがられているうちに見えてくるさまざまな幻影をながめはじめる。

濃い闇が次第に艶を持ち、その中からひたひたと水の匂いが立ちのぼってくる。かすかな内緒ごとを囁かれているような水の音も聞えてくる。河港の岸壁にうちよせてははじかえされる水の音は、何かに甘えて咽喉を鳴らしている小動物の声のようにも聞かれる。未明の河港の棧橋ぎわの岸壁に私はしがみこんでいる。寒さが足元から背骨を這い上ってくるので、自分の膝をしっかりと抱きこみ、出来るだけ小さくなっている。

私の目に次第に艶をもつ水の色が映りはじめると、河口の向う岸の屋並も、闇の中に影をつくっているのが見分けられる。水と空の境さえ、ぼんやりと見えはじめる。薄れた星座が今にも海に堕ちこみそうに空にかかっているあたりから、ふいに汽笛が鳴りはじめる。ぼうっという力強い声は、水にこだましてほんものの声の何倍もの音量を持つ